

文化庁主催

深める・広げる—

拡張する伝統工芸展

Greater Depth and Evolution :
An Exhibition of the Expanding World
of Traditional Crafts

2022年1月19日(水)～1月31日(月)

日本橋三越本店 本館7階 催物会場 [最終日午後6時終了] 入場無料

主催:文化庁 協力:公益社団法人 日本工芸会 企画協力:株式会社 三越伊勢丹

伝統とは、挑戦の積み重ね。

伝統工芸の作家たちは、先人たちの技を継承しながら創意あふれる作品を生み、それらが新たな伝統として引き継がれ、国内外から注目を集める存在となっています。本展覧会は作家たちの技に焦点を当て、その系譜や表現の多様性を紹介するとともに、インスタレーションなどの手法も用いた多様な展示により、伝統工芸の新しい楽しみ方を提案します。若い世代の方々にもご覧いただくことで、日本文化のすばらしさの再認識・再発見につながり、伝統工芸の持続的な発展にもつながることを願っています。

 文化庁



四代 田辺竹雲斎
Connection —無限—
3.6×2.1×1.7m
PHOTO by Tadayuki Minamoto

※諸般の事情により、営業日・営業時間、予定しておりましたイベントなどが変更・中止になる場合がございます。
必ず事前にホームページを確認してからご来店ください。

〒103-8001 東京都中央区日本橋室町1-4-1 / 電話03-3241-3311 大代表
※数に限りがある商品もございますので、品切れの際はご容赦ください。



MITSUKOSHI
日本橋本店
www.mitsukoshi.co.jp

1955年の日本工芸会誕生から60年以上にわたり、伝統工芸は進化と深化を続けています。日本工芸会の作家たちは、日々それぞれの技を磨き、確かな技の先に実現されるさまざまな創意あふれる表現に挑んできました。

この展覧会では、一つの技から多様な表現が展開している現況を、七部門それぞれから幾つかの技術を取り上げ、その技術を用いた表現の広がりを紹介していきます。ベテランから若手までを含む作家それぞれの創意、および作者と素材との真摯な対話から生まれる作品の数々によって、〈伝統工芸の新しさ〉を体感していただく展覧会です。

各作家の選んだ素材へのアプローチを通して、驚くほど豊かな作品が生まれ、それらの作品は実に躍動的な空間を生み出します。それらは、私たちの日常に、素敵な非日常をもたらす可能性をも秘めています。

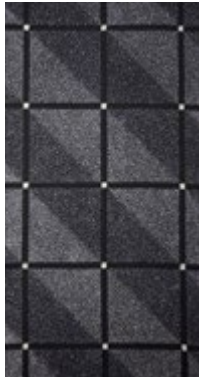
外館 和子 (企画監修/多摩美術大学教授・工芸評論家)

染織

友禅＝森口邦彦、高橋寛、中川正洋、生駒暉夫
生地に絵画を描くように糊でラインを描き、糊が置かれた以外の部分に色が染められていきます。筒糊の置き方や蒔き糊の技法によって、一種の点描のような効果も示すことができます。着物の形を生かしたダイナミックな絵画的表現が可能。

振り織＝土屋順紀、磯井佐子、海老ヶ瀬順子
通常、織物の生地はタテ糸とヨコ糸が直交しますが、振り織では、数本のタテ糸が絡み合いながらヨコ糸と交差することで生地組織に隙間が生まれ、透け感のある軽やかな生地が生まれます。

紬織＝村上良子、大高美由紀
真綿から紡いだ紬糸を用いた絹織物を紬織といいます。作者が考案した模様即して糸を予め染め分けることで縞模様などを表現することも可能。



高橋寛
友禅染帯「露地」
幅35cm

金工

※金工の主要な技法は鑄金・鍛金・彫金の3つ。

象嵌＝中川衛、大槻昌子、奥村公規、鹿島和生、前田宏智、村上浩堂、原智

象嵌は、金工の装飾技法の一つ。一つの金属素材に別の金属をはめ込み模様を作ります。歴史的にも日本人はさまざまな色金を使いこなすことを得意としてきました。

中川衛
象嵌銀花器「帰来」
高24×31×11cm



諸工芸

七宝＝勝文彦、松本三千子

主に金属の素地にガラス質の釉薬を焼きつけて装飾する技法。施釉後、素地の金属を酸で腐食させて取り除き、釉薬だけを残すこともできます。

鍍金＝中村佳睦、江里朋子

金や銀などの箔を細く直線状に切ったものを、筆と接着剤を用いて型の表面に貼る装飾技法。日本では仏像・仏画の装飾技法として発達。



切りガラス＝白幡明、渡邊明、氣賀澤雅人、小川郁子

ガラスの表面をカットして模様を作る技法です。透明なガラスに色ガラスを被せたり、全体の形に対してどのようにカットを入れるかにより、表現が広がります。

氣賀澤雅人
硝子切り鉢「群青」
高14.5×29cm

陶芸

備前焼＝伊勢崎淳、隈崎隆一、伊勢崎創

岡山県備前市とその周辺において、備前の土と薪窯焼成を基本に制作されてきた無釉の焼締陶。エッジのある力強い形はもちろん、窯変など表面の景色も、全て作者の意図によるもの。

白磁＝前田昭博、塚本満、高橋奈己、佐藤典克、和田的

陶土ではなく磁土を用いて1300度前後の高温で焼成。白磁は主に形で個性が表現されますが、現代の白磁には形の個性に加え、各作家により異なる白の表情が見られます。成形には、轆轤だけではなく、塊からの削りや鋳込みも用いられます。



和田的
白器「表裏」
高37×20.5×13cm

色絵磁器＝十四代今泉今右衛門、前田正博、武腰潤、吉田幸央、井戸川豊、南絢子

色絵磁器は和絵具や洋絵具で絵付けした磁器で、その模様は具象、抽象など実に多様。形との関係により、絵や模様が立体的に立ち上がる美しさが見どころ。

練上＝尾形香三夫、松井康陽、星野友幸

練上は、土そのものに顔料などを混ぜた色土を組み合わせて模様や形を作る技法で、器の内外が同じ模様。模様と形の一体感が魅力。

漆芸

乾漆＝増村紀一郎、野口洋子、築地久弥

乾漆は、漆芸の成形技法の一つ。まず、もともになる型を準備し、その型に漆と麻布を塗り重ねて形を作る技法。漆芸の内でも最も自由な形を作ることのできる技法でもあります。

蒔髹＝山下義人、佐々木正博、藤田正堂、松本法子、中田真裕

蒔髹は漆芸の装飾技法の一つ。漆の面を彫った窪みに色漆を重ね、最終的に表面が平らになるよう研ぎ出して模様を見せる技法。彫り方と色漆の組み合わせ方で、さまざまな表現が可能。



中田真裕
乾漆蒔髹水指「うしろ雲」
高22.5×15.6×15.6cm

竹木工芸

指物＝須田賢司、渡辺晃男、古谷禎朗、五十嵐誠

指物は、木工芸の成形技法の一つ。釘やねじを使わずに、木の板の端にほぞとほぞ穴を作ることで、木材と木材を組み合わせて、箱や家具を作る技法。

編組＝勝城蒼鳳、藤沼昇、田中旭祥、藤塚松星、武関翠直、四代田辺竹雲斎

竹工芸は、繊維の造形。主に竹ひごを編むことと組むことで形を作り、同時に模様も形成。作品に使用するのにふさわしい竹ひごは作者自身が準備します。



古谷禎朗
キャビネット
高90×70×33cm

人形

陶胎彩色＝中村信喬、島田耕園、中村弘峰

やきもので人形の形を作り、その表面に日本画の顔料などで彩色していく技法。ポーズや動勢、バランスの重要性は彫刻と同様ですが、それらだけでなく、衣装の美しさや顔の表情も人形の魅力。

木芯桐壺＝原山桂子、井上楊影、杉浦美智子、小島尚子

木を芯として桐壺(桐材の粉と糊を練り合わせた粘土状の材料)でボディを作った後、布や紙の衣装を着せたり彩色したりして仕上げる技法。



原山桂子
ひこばえ
高26×13×13cm

(敬称略)

ギャラリートーク「伝統工芸の現在と未来」

1月22日(土) 午後1時30分より(約40分間)
「深める・広げる一拡張する伝統工芸展」会場内 参加費無料

パネラー：外館和子 (本展企画監修、多摩美術大学教授・工芸評論家)
和田的 (陶芸作家)
藤塚松星 (竹工芸作家)

※イベントのお申込方法等詳細につきましては、展覧会ショップニュースをご確認ください。

下記のコードで展覧会ショップニュースをご覧ください。



※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、弊社基準により入場を一時制限させていただきます。ご了承ください。

※ご来場の際は必ずマスクを着用ください。会場内では会話は控えるなど、新型コロナウイルス感染症対策への協力をお願いします。



左記のコードで日本橋三越本店アートギャラリーメルマガジンにご登録いただけます



左記のコードで日本橋三越本店アートギャラリーインスタグラムをご覧ください